

フリードリヒ・シラーの美学思想における自然再生の論理

平山敬二

基礎教育課程

Logic of Nature Restoration in Friedrich Schiller's Aesthetic Thought

HIRAYAMA Keiji

Division of Liberal Arts and Science

(Received November 4, 2011 ; Accepted January 12, 2012)

はじめに

シラー (Friedrich Schiller, 1759-1805) の美学思想にみられる近代批判は、アンビヴァレント (両価的) なものである。古代と近代との比較において、近代における自然的調和の喪失を嘆くシラーは、同時にまた古代から近代への歩みを人類の歴史が辿るべき必然としても捉えており、そこに古代的自然に対する近代的理性の独自の意味をも見出している。しかし、シラーは近代という時代を、健全なる自然的調和を喪失した病的な時代、人間性における理性と感性とが内的に分裂してしまい、人間的自然の本来的な「総体性 (Totalität)」¹⁾ が破壊されてしまった時代と捉えている。シラーによれば、「近代の人間性にこの傷を負わせたのは文化 (Kultur) それ自身」²⁾ であり、われわれ近代人には、この段階に止まることなく、「技術が破壊してしまったわれわれの自然におけるこの総体性をより高い技術 (eine höhere Kunst) によって再び打ち立てること」³⁾ が求められている。

この失われてしまった「総体性」を「より高い技術」によって再び打ち立てるといことは、とりもなおさず、近代という時代の中であって、近代が喪失してしまった自然的調和を再び回復するというに他ならない。そしてこの課題は、シラーが人間の美的教育によって獲得されるべきものと考えた「美的なもの」が持つ本質的な力によって果たされるべきものと考えられる。シラーにとって、美的なものの本質を追究することは、同時に自然的なものの本質を解明することであった。シラーは、「詩人はすでにその概念からいって、いかなる場合にも自然の守護者である」⁴⁾ とし、その自然が破壊されていると感じ取った場合には、「彼らは自然の証人として、また自然の復讐者として現れるであろう」⁵⁾ と語る。そして「われわれの文化は、理性と自由の道を通ってわれわれを自然に連れ帰すべきである」⁶⁾ とも述べている。

本稿は、ややもすれば「形式」による「素材」の支配⁷⁾、人間の自由意志による自然的なものの支配、理念による現実の支配として、反自然的なもの、自然疎外的なものとして理解されがちなシラーの美学思想の中に、自然再生の論理を読み取ろうとする試みである。しかし、シラーの場合、ここで再び蘇生されるべき自然とは単に過去のなものに止まるものと考えられてはならない。古代ギリシャにおける自然を理想としながらも、それはすでに人類にとって過去のなものであるアルカディアとしての理想に他ならないとシラーは理解していたように、ここで再び生まれ出るべき自然とは、いわば未来的な理想としてのエリュシオンにおける自然として捉えられるべきものである。シラーの語る自然という語は、その使われる箇所によって多様に変化し必ずしも一義的なものではないが、その根源的な意味での自然とは、本来感覚的なものとしては直接姿を現すことのない、シラーの表現によれば「現象の覆いの下に横たわっている」⁸⁾ 精神的理念的なものであると考えられる。そしてこの根源的な自然を現代において蘇らせることこそが現代における文化の根本的な課題であるとシラーは考えていると思われるのである。

1. シラー美学における自然概念

シラー美学において自然という概念は自由の概念とともにきわめて重要なものであると言えるが、すでに指摘したようにその意味は使われる個々の場所によってさまざまに異なった使われ方をしている。シュブランガーは、シラーの語る自然概念を丹念に調べ上げようとしたルッツの試みがしばしば絶望的な様相を呈することに同情を示しながらも、それらは大きく二つの意味の自然概念として捉えられることを指摘する⁹⁾。その一つはいわゆる「創造的力としての自然」(Natur als die schöpferische Macht) すなわち能産的自然 (natura naturans) として

捉えられる自然を意味する場合と、他の一つは「被創造的な自然」(geschaffene Natur) すなわち所産的自然(natura naturata)としての自然を意味する場合とである。前者の「創造的力としての自然」とは自然的秩序を産み出すもの、法則と秩序を創立する創造的な神の別名とも言えるものである。後者の「被創造的な自然」とは、大まかに言えば存在するものの存在様態や性質を意味するもので、それらは、例えば、「自然と自由」、「自然と芸術」、「自然と文化」というようなその対語との対立関係においてのみ理解されるようなもので、個別にはきわめて多様な意味に満ちているものである。それらはその時々々の文脈によって、「肉体あるいは生体としての自然」、「無意識的・本能的なものとしての自然」、「意のままにならぬもの、苦悩するものとしての自然」、「カントの意味における現象としての自然」といった特定の意味を持つことになる¹⁰⁾。

シュブランガーは、シラーのこのような多様な自然概念の現れのなかに、既成の概念には適合しきれないシラーの力動的な内面性が映し出されているのを見るのである¹¹⁾、それと同時に、シラーの根本的な精神のあり方のなかに、「自然との闘いに終止符を打とうとする」試み、あるいは「自然との繋がりを手に入れよう」とする精神を見て取るのである。シュブランガーによれば、シラーにとって「自然」という言葉は、ある種の「感情価値」(Gefühlswert)を持った言葉であり、それはゲーテにあっては悦ばしい所有物に他ならなかったが、シラーにあっては痛みを伴って探し求められねばならないものとしてあったと考えられるのである¹²⁾。

カント研究以前のシラーにおける自然概念には、カール学院時代の哲学教授アーベルや若きシラーが愛読したと言われるガルヴェ訳によるイギリスの道徳哲学者ファーガソンの著作などの影響の下に、ライプニッツやシャフツペリーの思想が反映していると言われている¹³⁾。1786年に公表されたシラーの『哲学書簡』の中の「ユリウスの神智学」は当時のシラーの思想表明と考えられるものであるが、そこには明らかにライプニッツやシャフツペリーの思想の影響と考えられる次のような表現が見られる。「宇宙におけるあらゆる完全性は神において結合されている。神と自然とは二つの偉大さであり、それらは互いに完全に同一である。」¹⁴⁾「神の実体において共に存在する調和的活動の全総体は、この実体の模像である自然の内に、無数の程度と量と段階で別々になっている。自然は(僕にこの比喩的な表現を許したまえ)、自然は無限に分かたれた神である。」¹⁵⁾ここで語られているような神と自然とを同一のものと捉えまた自然を無限に分割された神と捉える思想は、スピノザ的な一種の汎神論

(Pantheismus)とも言えるもので¹⁶⁾、明らかにカント研究以降のシラーの自然概念とは区別されるべきものとも考えられるが、また一方でヴィーゼ、リーデル、テイラーなど多くの研究者が指摘しているように¹⁷⁾、この時期のシラーの自然観がカント研究以降のシラーの美学思想の中にもなお深く根を下ろしているのもまた事実であると言えるであろう。

その端的な現れと考えられるものをわれわれはシラーのいわゆる『カリアス書簡』における「純粹自然」(reine Natur)という概念にみてとることができる。この概念はシラーがカント美学研究の後に、美を「現象における自由」(Freiheit in der Erscheinung)として捉えようとする際に使用されるものであるが、そこでは次のように言われている。「したがって理性的存在者が行為するときには、それが純粹な自己規定を示すべきである場合、純粹理性から行為するのでなければならない。一方、単なる自然的存在者が行為するときには、それが純粹な自己規定を示すべきである場合、純粹自然から行為するのでなければならない。なぜなら理性的存在者の自己とは理性であり、自然的存在者の自己とは自然であるからである。」¹⁸⁾シュブランガーも指摘するように、この「純粹自然」¹⁹⁾という概念は、シラーがカント哲学との取り組みのなかから獲得したものであり、『純粹理性批判』のなかで展開された自然概念を越えて、『判断力批判』の研究に即してシラーが手に入れた「もう一つ別の自然概念」(ein anderer Naturbegriff)²⁰⁾と言えるようなものである。

この「純粹自然」という表現とは別に、シラーはそれと同じような意味において『素朴文芸と情感文芸』のなかでは、「真実の自然」(wahre Natur)という表現もしている。(引用)「すなわちそれは現実の自然のことであるが、これと素朴文芸の主体である真実の自然とは、この上なく慎重に区別しなければならない。現実の自然(wirkliche Natur)はどこにでもあるが、真実の自然はそれだけ一層稀なのである。なぜならそれには存在の内的必然性が伴わなければならないからである。」²¹⁾ここで言われている「真実の自然」がまさに「真実の自然」であるために必要であると考えられる「存在の内的必然性」(eine innere Notwendigkeit des Daseins)というものは、『カリアス書簡』の中では、「形式の内的必然性」(die innere Notwendigkeit der Form)としても語られている²²⁾。

カント美学研究の後に美を「現象における自由」として捉えたシラーは、この場合の「自由」なるものは「理性によって対象に単に貸し与えられた」(dem Objekt von der Vernunft bloß geliehen wird)²³⁾ものにすぎない

こと、また「超感性的なもの以外には何ももの自由ではありえないし、また自由それ自身はそのようなものとしては感性界に属することはできない」²⁴⁾ ものであるということを経験哲学を下に繰り返し確認しながらも、「感性的なものの自己規定」(Selbstbestimmung des Sinnlichen)²⁵⁾ ないし「感性的なものの自律」(die Autonomie des Sinnlichen)²⁶⁾ を、「現象における自由」として、すなわち「美」(Schönheit)として捉える立場を鮮明に打ち出していくのである。そしてそこからは自由なるものとして現象する自然を美なるものとして捉えるシラー独自の美学的地平が必然的に開けてくるのであり、次のような言い方で語られるのである。「自己規定(Selbstbestimmung)というこの偉大な理念が、自然のある種の現象からわれわれに反映してくる。そしてそれをわれわれは美とよぶのである。」²⁷⁾ あるいはまた「理性的なものの自己規定は純粹理性規定、すなわち道徳性である。感性的なものの自己規定は純粹自然規定、すなわち美である。」²⁸⁾

2. 自然喪失に向けられた近代批判

シラーの美学的著作の中では、しばしば鋭い近代批判が展開されている。その批判の主な矛先は、近代という時代が、古代ギリシャの文化が有していたような自然的調和を失い、人工の時代、分裂の時代になってしまったというところにある。シラーは近代という時代を『美的教育書簡』のなかで、次のように描写している。「いまや国家と教会、法律と道徳とは分裂してしまった。楽しみは労働から、手段は目的から、努力は報酬から分離された。人間は全体のなかの個々の小さな断片にのみいつまでも縛りつけられているために、自分自身を断片としてのみ形成することになる。自分の回す歯車の単調な響きだけをいつまでも耳にしながら、人間は自己の存在の調和を育てることはない。」²⁹⁾ このような近代という時代のあり方に対して、シラーは古代ギリシャという時代をそれとは対照的なものとして同書において次のように描き出している。「しかし時代の性格に注目するとき、人間性の今日の形式と、かつての、とくにギリシャ時代の人間性の形式との間に見出される対照は、われわれを驚嘆させずにはおかない。われわれが他のいずれの単なる自然に対しても当然に自慢できる成熟や洗練性も、ギリシャの自然に対してはどれも具合が悪いのである。ギリシャ的自然は、芸術の一切の魅力と、知恵の一切の尊厳とが結びつき、しかもわれわれの自然のように、それらのものの犠牲となることはない。」³⁰⁾

このような古代ギリシャにおける人間性と近代における人間性のあり方の違いは、いったい何処から来るので

あろうか。シラーによれば、「それは、自己の形を与えるものが前者(ギリシャ人)にとっては一切を統合する自然(Natur)であり、後者(近代人)にとっては一切を分割する知性(Verstand)だからである。」³¹⁾ と考えられている。そしてさらに、「近代の人間性にこの傷を負わせたのは、文化(Kultur)それ自身であった。」³²⁾ とも語られるのである。古代ギリシャにおけるような「一切を統合する自然」(die alles vereinende Natur)を失い、その代わりに「一切を分割する知性」(der alles trennende Verstand)によって支配される近代にあっては、社会的組織もまたその部分と全体との有機的生命的な結びつきを失い、自然的調和を喪失した無機的機械的なものとなってしまっていると考えられ、シラーはそれを次のような比喻で言い表している。「それぞれの個体が独立した生活を楽しみ、必要な場合には全体にまとまることもできたところのギリシャ国家のあのポリプ的自然は、いまや、無数に多くの、しかし生命のない部分の寄せ集めによって機械的な生活の全体がつくられるという、精巧な時計仕掛けに場所を譲ってしまったのである。」³³⁾

しかしシラーは、一方で、すでに指摘したように古代から近代へのこのような歩みは、われわれ人類の歴史的展開の必然的な結果であり、古代ギリシャが示す文化のあり方やその調和的総体的な人間性のあり方は、それが如何に優れたものであったとしても、すでに過去のなものでしかなくとも捉えているのである。「個体はその本質のこのような分裂によって災いとなるにしても、しかし人類全体としては、これ以外の方法では進歩しえなかったであろうということ、私はあなたに喜んで認めたい。ギリシャの人間性という現象は最大限のものであって、この段階で動かずにいることも、より高く登ることもできないひとつの極限であったということには疑問の余地がない。動かずにいることができないというのは、知性がすでに所有する蓄えによって、どうしても感情や直観から離れて明晰な認識にむかって努力せざるをえなかったからであるし、より高く登れないというのは、一定の充実ところの暖かさとに両立できる明晰性は、一定限度のものだけだからである。ギリシャ人はこの限度に到達してしまったのである。それで彼らが一層高い形成へと進もうとしたとき、彼らはわれわれ同様、その本質の総体性を破棄して、別々に分かれた軌道に沿って真理を追求しなければならなかったのである。」³⁴⁾

古代から近代への歩みをこのように捉えるとき、近代における理性と感性との厳しい二元的分極的あり方は、必ずしも否定的なものとして考えるべきものではなく、理性と感性、精神と自然との厳しい二元的分極性に

において、確かに近代人は古代人の調和的総体的な人間性のあり方から疎外されてしまったかも知れないが、しかし一方で近代人は、古代人の知り得なかった近代的理性の指し示す新たな真理と理想とを探究する途上にあると考えることができるのである。古代から近代への歩みが歴史の必然であり、人類の歩むべき未来がその方向にあるとするならば、ここでの近代人の課題は、過去へ戻るとするあり方ではなく、近代を先に進めるとするあり方の中で、近代的人間におけるその人間性の調和的総体的なあり方をいかに取り戻すことができるかということのうちにあるといわれねばならない。そしてこの課題を果たそうとして提示されたものこそシラーの美的教育論に他ならないと言えるのであるが、それは同時に近代という時代における自然的調和の再生の思想であるとも考えられるのである。

3. 理念的自然としての素朴概念

シラーが具体的に自然というものをどのようなものとして捉えていたかということを理解するうえで、きわめて有意義な叙述が『素朴文芸と情感文芸』の中に見て取れる。『素朴文芸と情感文芸』の冒頭において、シラーは、おそらくわれわれの誰もが経験するであろうと思われる「素朴なもの」(das Naive)についてのある種不思議な感動体験について語っている。「人生には、植物、鉱物、動物、風景などの自然に対し、また子供とか、田舎の人や原始世界の風習とかの人間の自然に対し、それがわれわれの感覚に快いわけでも、われわれの知性や趣味を満足させるわけでもなく(どちらの場合にもたゞたゞその反対の場合がある)、単にそれが自然であるというだけのために、一種の愛と感動的な尊敬を捧げるときがあるものである。」³⁵⁾「感受性をまったく欠くというわけではないある程度洗練された人なら誰でも、野外を散歩したり、田舎で生活したり、古代の記念物の傍らにたたずむとき、要するに、人工的な生活環境や状態のなかであって、突然、単純な自然の光景に驚かされるとき、このようなことを経験する。このようなしばしば欲求にまで高められた関心は、花や動物や簡素な庭園や散策や田舎とその住民や、またはるか古代のさまざまな製作物などに対するわれわれの多様な愛好心の根底をなすものである」³⁶⁾。このような体験をシラーは「素朴なもの」の体験として捉えるのであるが、これらの体験は、普通の意味での美的体験とは異なるものと考えられる。なぜならば、それらの対象がわれわれに「一種の愛と感動的な尊敬」を呼び起こすのは、シラーが言うようにそれらが「感覚に快い」からでもなく、また「趣味を満足させる」からでもなく、かえってその反対の場合が往々

にしてあるのであり、その感動の根拠を尋ねるならば、それはそれらが「自然である」ということそのこと自体に求めるほかないと考えられるからである。シラーによればこのような体験が成立するには、次の二つの条件が必要であるとされる。第一には、その対象が「自然であるか、あるいは少なくともそうみなされること」、第二には、「その対象が(もっとも広義において)素朴であること、すなわち、自然(Natur)が人工(Kunst)と対照をなし、しかも人工を恥じいらせること」である。そしてこの「第二の条件が第一の条件につけ加わるや否や、自然は素朴なものとなる」と考えられるのである³⁷⁾。

このような観点から捉えられた素朴なる自然を、シラーは「自発的な存在」(das freiwillige Dasein)、「自立的な物の存在」(das Bestehen der Dinge durch sich selbst)、「不変固有の法則に従う存在」(die Existenz nach eignen und unabänderlichen Gesetzen)として捉える³⁸⁾。そしてまた、自然に対するこのような喜びないし満足は、「美的」(ästhetisch)なものではなく「道徳的」(moralisch)なものであると考えられている。なぜならば、自然に対するこの種の満足は、その対象の「形的美しさ」(Schönheit der Formen)などを直接観察するところからもたらされるものではなく、それらが「自然である」(Natur sei)ということに信ずることに基づく「理念によって媒介される」(wird durch eine Idee vermittelt)ことによって生ずるものと考えられるからである³⁹⁾。さらに例を挙げながらシラーは次のように論じている。「目立たぬ一本の花、一つの泉、苔むした一つの石、鳥のさえずり、蜜蜂のうなり声などがそれ自体だけでどうしてわれわれをそんなに惹きつけるのであろうか。なにがそれにわれわれの愛を要求する権利を与え得るのであろうか。われわれがそれらのものなかに愛するのは、こうした対象ではなく、それらによって表された理念なのである。われわれはそれらのものなかに静かな創造する生命、自己自身から生まれる安らかなはたらき、固有の法則に従う存在、内的必然性、自己自身との永遠の一致を愛するのである。」⁴⁰⁾

先にも指摘したように、シラーの近代に対する批判は、近代という時代が古代ギリシャにおけるような調和的自然を喪失してしまったところにあった。古代ギリシャにおける「一切を統合する自然」は、いまや「一切を分割する知性」に取って代われ、そこでは精神と自然、理性と感性とが敵対的、分裂的なものとしてのみ作用し、それら両者を統合する根源的な自然が見失われてしまっている。しかしまた理性と感性、精神と自然の二極的な分裂は人類の歴史的進歩の必然的歩みでもあった。そのような近代人にとって、ここで捉えられているような

「素朴なもの」は、近代が失ったこの根源的調和的自然を思い起こさせるものであると同時にふたたびそこへ向かって努力すべき理念的課題を啓示するものであると言っ
てよいであろう。シラーによれば、「そのような存在は、われわれがかつてあったところのものであり、またふたたびなるべきところのものである。われわれはかつてそれらとおなじように自然であった。そしてわれわれの文化（Kultur）が理性と自由の道を通して、ふたたびわれわれを自然へと連れ戻すべきなのである。したがってそれらは、いつまでも貴重なわれわれの過ぎ去った幼年時代を表すものであり、それゆえにそれらはわれわれを一種の哀感でみたます。同時にそれらはまた、理想におけるわれわれの最高の完成を表すものでもあり、それゆえにそれらはわれわれを崇高な感動へと導くのである。」⁴¹⁾ 素朴なものとしての自然は、一方では「われわれがかつてあったところのもの」（was wir waren）、「いつまでも貴重なわれわれの過ぎ去った幼年時代」であると同時に、他方では「われわれがふたたびなるべきところのもの」（was wir wieder werden soll）、「理想におけるわれわれの最高の完成」を表すものとされている。そして「われわれはかつてそれらとおなじように自然であった」のであり、また「われわれの文化が理性と自由の道を通して、ふたたびわれわれを自然へと連れ戻すべきなのである」と考えられている。前者はわれわれにとって過去の調和としてのアルカディア的自然であり、後者はわれわれにとって未来的な調和としてのエリュシオンの自然であるとも言えるであろう。

シラーは、われわれ近代人と古代人としてのギリシャ人とを比較し、「彼らは自然に感じたが、われわれは自然なものを感じる」⁴²⁾ と言う。シラーによれば、「ギリシャ人は人間性のうちの自然を失っていなかったので、自分の外の自然を見ても、それに驚かされることはなく、自然を再発見するための対象を求めるといような切実な必要も感じなかった。」⁴³⁾ のである。それに対して、われわれ近代人が自然に対して強い愛着を感ずるのは、「われわれのもとでは自然が人間の内から消え去ってしまい、われわれが自然の真実の姿に再会し得るのは、人間の外、すなわち魂のない世界においてだけだからにほかならない。」⁴⁴⁾ とされる。そして、「われわれがより多く自然に則しているということではなく、まったく逆に、われわれの境遇や状況や習慣が自然にさからっているということこそが、真実と単純とに対して目覚めた衝動を駆りたて、……道徳的世界では望みえない満足を自然的世界のなかで得るようにとわれわれに強いる。」⁴⁵⁾ のであると論じられる。そして「自然に対するわれわれの感情は、健康に対する病人の感情に似ている」⁴⁶⁾（Unser G

efühl für Natur gleicht der Empfindung des Kranken für die Gesundheit.）と語られるのである。

4. 芸術による根源的自然の再生

われわれは先にシュプランガーの説をもとに、シラーにおける多様な自然概念もそれらを大きく捉えるならば二つの自然概念、すなわち中世以来の区別にさかのぼる能産的自然概念（natura naturans）と所産的自然概念（natura naturata）として捉え得ることを見た。一方は「創造的力としての自然」概念であり、他方は創り出されたものとしての「被創造的な自然」概念、カント的な意味における「現象の総体としての自然」（die Natur als den Inbegriff von Erscheinungen）⁴⁷⁾ 概念である。先に指摘した『カリアス書簡』での「純粹自然」や『素朴文芸と情感文芸』での「真実の自然」といった概念は、前者の「創造的力としての自然」として捉え得るものと考えられるが、さらにわれわれは、シラーによってその戯曲『メッシーナの花嫁』（1803年）の出版時に付録として表された『悲劇における合唱団の使用について』というシラーの最後のまとまった芸術理論的著述のなかに、この前者すなわち「創造的力としての自然」概念についての記述に相当すると思われる端的な例を見て取ることができる。「芸術は、現実（das Wirkliche）をまったく離れて純粹に理念的（ideell）になることによってのみ、真実なのである。自然そのものは精神のまさに一つの理念であって、それは決して感覚されることはない。自然は、現象という覆いの下に横たわっていて、それ自身は決して姿を現さないのである。万物のこの精神を把握し、一個の身体的形式に纏めるといことは、理想の芸術（Kunst des Ideals）のみに与えられた、あるいはさらにそれに課せられた任務である。この芸術自身さえもこの精神を感覚の前にもたらすことはできないが、しかしその強い創造力によって構想力（Einbildungskraft）の前にもたらすことができる。そしてそれによって芸術は、あらゆる現実（alle Wirklichkeit）よりもより真実（wahrer）に、またあらゆる経験よりもより現実的（realer）になることができるのである。かくておのずから次のような結果になる。すなわち、芸術家は現実（Wirklichkeit）からのただ一つの要素をもそのままでは用いることができない。また彼の作品は、もしそれが一個の全体として現実性（Realität）を有し、自然と一致すべきものであるならば、そのすべての部分において理念的でなければならない。」⁴⁸⁾

ここで言われている自然とは、「精神のまさに一つの理念」として捉えられており、それは「現象という覆いの下に横たわっていて、それ自身は決して姿を現さない」

ようなものとして捉えられている。そしてこのようないわば理念的根源的自然を形あるものとして表現することが芸術の本来の使命と考えられているのであるが、しかしこの芸術によってもそれは感覚的なものとしては表現することはできないのであり、芸術にできるのは芸術が有する強い創造的作用によってそれをわれわれの構想力の前に差し出し、それをわれわれの構想力によって捉え得るものとなす事だけであると考えられている。このことはシラーに従って別の言い方をすれば、芸術とは、感覚的現象としての「現実の自然」を、精神的理念的なものとしての「真実の自然」として構想力に対して描き出すことであると言い得るであろう。そしてこの「真実の自然」とは、近代においては、その理性と感性との二元的分裂的精神のあり方において見失われてしまっていると考えられるところのものであり、その両者の分裂的あり方を越えて、両者を再び調和的に結びつけ統一するところの、その両者の根底において働くものとして予想される理念的根源的自然のことであると考えられるのである。そしてこの近代において失われていると考えられるこの理念的根源的自然を「真実の自然」として現代において再び蘇らせることこそが現代における芸術の使命であると考えられていると言い得るのである。

シラーによれば、「自然が経験として、また（行為し、感受する）主体として人間の生活のなかから次第に消えていくに従って、われわれは、自然が詩人の世界のなかに理念として、また対象として現れてくるのを見る。」⁴⁹⁾ という。そしてまた、「詩人はすでにその概念から言って、どんな場合にも自然の擁護者である。詩人がもはや十分にはそうであることができず自分自身のなかに恣意的で人工的な形式の破壊的な影響をすでに経験するか、あるいはそうでなくても、そういう影響と戦わなくてはならない場合には、彼らは自然の証人として、また自然のための復讐者として現れるであろう。彼らは自然であるか、あるいは失われた自然を求めるかのどちらかであろう。」⁵⁰⁾ と述べている。

このような意味において、シラーの美学思想は、近代における自然喪失を人間性の危機として捉え、その蘇生ないし再生を批判的に唱導するものとして捉えうると考えられるのであるが、この場合にシラーが蘇らせようとするのは、普通の意味での外なる環境としての自然ではなく、何処までも精神の内なる理念的精神的な自然がその眼目となっているということは否定できない。もとより二百年前のシラーの時代にあっては、現代におけるような外なる自然についての破壊の深刻さというものは未だ真剣に論じられる状況にはまだなかったであろう。しかし近代自然科学ないし唯物論的啓蒙思想の台頭のなか

で、またフランス革命という近代的政治革命や機械の時代の登場としての産業革命の進展等を目の当たりにするなかで、近代という新たなる時代が本質として持っていると考えられる自然破壊的傾向のなかに、人類の進歩の歴史的な必然性の認識とともに、そこには何か本当の意味での進歩のイメージとは噛み合うことのない人類にとっての危機的なものを、シラーは根源的自然の喪失として感じ取っていたのであると言えるであろう。そしてその危機を克服する力は、われわれの精神における根源的自然の働きの喪失を危機として感じ取ることでできるわれわれの詩的感受性のなかにその基礎をもっているとシラーは考えていたと思われるのである。「今日でもなお自然は、詩的精神がみずからを養う唯一の焔である。詩的精神はもっぱらそこから自己のすべての力を汲み取ることであり、文化に捉えられている人工的な人間においても、詩的精神はもっぱら自然にむかって語るのである。」⁵¹⁾ 「詩的精神は人間性のなかに不滅で消え去ることがない。それは人間性ととともに、また人間性への素質とともに決して失われるはずがない。なぜなら、たとえ人間がその空想や知性の自由によって、自然の単純さ、真実、必然性から離れるにしても、自然への道は人間につねに開かれているばかりでなく、力強く滅しがたい衝動、すなわち道徳的衝動が人間を絶えず自然へと押し戻すのであって、詩的能力はまさにこの衝動ときわめて密接な近親関係にあるからである。したがって、この詩的能力は自然の単純さとともに失われてしまうのではなく、ただ別の方向に向かってはたらくのである。」⁵²⁾

結びにかえて

かつてコルフは、その著『ゲテ時代の精神』において、1770年から1830年に至る60年間を「ゲテ時代」として捉え、その時代における自然概念について次のように述べている。「生き生きとした自然（die lebendige Natur）、生き生きとした神（der lebendige Gott）、それらは、生命として理解された自然と神的なるものとして理解された生命という同じ事柄についての二つの異なった表現にすぎない。そしてそれは『自然』というこの言葉においてゲテ時代が感じ取っていたところのものであった。それは脱神聖化された機械的な自然科学の自然ではなくて、新たなる宗教性についての理解に基づく神聖なるものとして崇められた自然のことである。」⁵³⁾ このコルフがいうところのゲテ時代は、同時にドイツ観念論が生成する時代とも重なるのであるが、コルフはこのゲテ時代を貫くものが、17世紀の科学革命によってもたらされた「世界の自然科学的神性剥奪」の後に再び世界を神的なものとして捉えようとする新たなる世界感

情であるとしている。

カール学院時代に医学を学ぶ学生でもあった18歳のシラーは、2歳年下の結核で病死した学生ヨハン・ヒラーの遺体解剖を行い、その報告書を書くというような経験もしているのであるが、そのようなシラーにとっても、近代の自然科学がもたらした新たな自然観と従来のキリスト教および古典的伝統としての古代ギリシャ文化に基づく自然観との対立のなかから、人間における物質的肉体的側面と霊的精神的側面とをどのような関係の下に捉えるかということは、重大な関心事であったに違いない。シラーのカール学院時代における卒業論文はまさにそのことを扱ったものであり、それは『人間の動物的自然と精神的自然との関連についての試論』(Versuch über den Zusammenhang der thierischen Natur des Menschen mit seiner geistigen.)と題されたものであったが、その中でシラーは、精神と肉体とを互いに共鳴し合う並列した二つの弦楽器に喩えるとともに、さらに「人間は精神と肉体とであるのではなく、人間はこの両実体がきわめて緊密に混合されたものである。⁵⁴⁾ „der Mensch ist nicht Seele und Körper, der Mensch ist die innigste Vermischung dieser beiden Substanzen.“ S.64. ということをあえて指摘している。また後の美学論文『優美と尊厳』のなかでは、次のように論じている。「自然は、すでに彼を理性的感性的存在、すなわち人間につくったことによって、次のような義務を彼に告知した。すなわち自然が結合したものを分離してはならない。彼の神的部分のもっとも純粋な表明においてさえ感性的部分を等閑にしてはならない。また一方の勝利を他方の抑圧の上に打ち立ててはならない。⁵⁵⁾

シラーにとって、美とはまさに根源的な意味での自然と同じく、互いに対立し合うものの調和と統一の原理そのものであった。理性と感性、精神と自然、理念と現実とを調和統一にもたらすものこそ美であると同時に根源的な意味における自然そのものに他ならなかった。美を「感性的なものの自己規定」、「感性的なものの自律性」「現象における自由」、「技術性における自然」として捉えるシラーにとって、美的なものの本質を探究することは同時に自然的なものの本質を探究することであったと言ってよい。このようなシラーの美学は、厳しく自然と自由とを分離したカントの批判哲学の立場を踏まえつつも、それを越えて美において再び自然と自由とを総合的に把握しようとするものであると言えるであろう。このことは言い換えるならば、理性と感性との二元的分極的な近代的知のあり方を前提としつつも、その近代的分極的な知のあり方において見失われがちな世界に対する知の総合的なあり方を、美的感情的な次元をも含めた意味

での根源的な知のあり方として再び蘇生させること、すなわち近代において見失われている根源的な自然を近代そのもののなかで再生することの必要性とその意味を説くものであったと言えるであろう。

それではシラーにおいて、いわゆる環境としての「外なる自然」と精神としての「内なる自然」との関係はいかなるものとして捉えられるのであろうか。『カリアス書簡』のなかでは次のように言われている。「それゆえ趣味の王国は自由の王国である —美しい感性界は、道徳的な感性界がそうであるべきように、幸福なる象徴である。そして私の外のあらゆる美しい自然存在は、自分のように自由であれ、と私に呼びかけてくる幸福なる市民なのである。⁵⁶⁾『素朴文芸と情感文芸』においては「素朴なるもの」はわれわれを取り囲む「絶え間ない神々の現れ」(eine beständige Göttererscheinung)⁵⁷⁾として捉えられ、そこにわれわれは「静かな創造する生命」「自己自身から生まれる安らかなはたらき」「固有の法則に従う存在」「内的必然性」「自己自身との永遠の一致」等を見出し、「そのような存在は、われわれがかつてあったところのものであり、また再びなるべきところのものである」ことを必然的に感じ取るのであるとされたのであった。シラーによれば、それらのものは自然であるが故に、「われわれを恥じいらせることなしにわれわれの模範であるという、まったく独特な喜びを与えてくれる⁵⁸⁾」ものと考えられている。そして「われわれがそれらのなかにもいつも見るのは、われわれには欠けているところのものであり、しかしまたそれを手に入れるために努力するように促され、そして決して到達できないとしても、限りない進歩のなかで自分をそれに近づけたいと望むものである。⁵⁹⁾とされる。このようなシラーの美学にあっては、環境における「外なる自然」と精神における「内なる自然」とは、互いの照応関係のなかで、単に感性的物質的な自然を越えた真実の文化的基盤としての根源的理念的自然の再生ないし生成のために、互いに互いを必要としあっているような存在、本来的な意味での交互作用的関係のうちにある相互的弁証法的な存在であると考えられるのである。

註

- 1) Friedrich Schiller, Ueber die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen, 1795, *Schillers Werke*, Nationalausgabe (以下、NA), Bd.20, Weimar, 1962, Brief 6, S.328. (石原達二訳『美学芸術論集』富山房、1977年、111頁)
- 2) Ibid., Brief 6, S.322. (邦訳同書、104頁) „Die Kultur selbst war es, welche der neuern Menschheit diese Wunde schlug.“
- 3) Ibid., Brief 6, S.328. (邦訳同書、111頁) „diese Totalität in unsrer Natur, welche die Kunst zerstört hat, durch eine höhere

- Kunst wieder herzustellen.“
- 4) Friedrich Schiller, Ueber naive und sentimentalische Dichtung, 1796, *Schillers Werke*, NA, Bd.20, S.432. (石原達二訳『美学芸術論集』富山房、1977年、252頁) „Die Dichter sind überall, schon ihrem Begriff nach, die Bewahrer der Natur.“
 - 5) Ibid., S.432. (邦訳同書、252頁) „da werden sie (Dichter) als die Zeugen, und als die Rächer der Natur auftreten.“
 - 6) Ibid., S.414. (邦訳同書、229頁) „unsere Kultur soll uns, auf dem Wege der Vernunft und der Freyheit, zur Natur zurückführen.“
 - 7) 例えば『美的教育書簡』第22書簡においては、「真に美しい芸術作品においては、内容は何もなせず、形式がすべてをなすべきである。……したがって、素材を形式によって根絶するというのなかに、巨匠の本来の芸術上の秘密が存しているのである。」と述べられている。F. Schiller, Ueber die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen, op.cit., NA, Bd.20, Brief 22, S.382. (邦訳同書、182頁) „In einem wahrhaft schönen Kunstwerk soll der Inhalt nichts, die Form aber alles thun; …… Darinn also besteht das eigentliche Kunstgeheimniß des Meisters, daß er den Stoff durch die Form vertilgt;“
 - 8) Friedrich Schiller, Ueber den Gebrauch des Chors in der Tragödie, 1803, *Schillers Werke*, NA, Bd.10, S.10. (菅原太郎訳「悲劇における合唱団の使用について」、新関良三編『シラー選集』、第2巻、富山房、1941年、541頁)
 - 9) Eduard Spranger, *Schillers Geistesart gespiegelt in seinen philosophischen Schriften und Gedichten*, Aus den Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften Jahrgang 1941. Phil.-hist. Klasse Nr.13, Berlin, 1941, S.28f. Cf. Hans Lutz, *Schillers Anschauung von Kultur und Natur*, Berlin 1928.
 - 10) E. Spranger, *ibid.*, S.28
 - 11) Ibid., S.76. Anmerkung 33.
 - 12) Ibid., S.29.
 - 13) Cf. Benno von Wiese, *Friedrich Schiller*, Stuttgart, 1959, 4., durchgesehene Auflage, 1978, S.76.
 - 14) Friedrich Schiller, Philosophische Briefe, 1786, *Schillers Werke*, NA, Bd.20, S.123. „Alle Vollkommenheiten im Universum sind vereinigt in Gott. Gott und Natur sind zwei Größen die sich vollkommen gleich sind.“
 - 15) Ibid. S.123–124. „Die ganze Summe von harmonischer Thätigkeit, die in der göttlichen Substanz beisammen existirt, ist in der Natur, dem Abbilde dieser Substanz, zu unzähligen Graden und Maaßen und Stufen vereinzelt. Die Natur (erlaube mir diesen bildlichen Ausdruck) die Natur ist ein unendlich getheilter Gott.“
 - 16) スピノザの影響については Rodney Taylor, Schiller’s Spinozan Theory of God and its Relation to the Person, *Perspectives on Spinoza in Works by Schiller, Büchner and C. F. Meyer*, New York, 1995, S.5–37.
 - 17) Cf. B. von Wiese, op.cit., S.99f., Wolfgang Riedel, *Die Anthropologie des jungen Schiller; Zur Ideengeschichte der medizinischen Schriften und der »Philosophischen Briefe«*, Würzburg, 1985. S.V., R. Taylor, op.cit., S.6f.
 - 18) Friedrich Schiller, Kallias oder Über die Schönheit (Brief an Gottfried Körner), 8. Februar 1793, *Friedrich Schiller Sämtliche Werke*, Bd.5, Carl Hanser Verlag, München, 1989, S.399–400. (石原達二訳『美学芸術論集』富山房、1977年、22頁) „Handelt also ein Vernunftwesen, so muß es aus reiner Vernunft handeln, wenn es reine Selbstbestimmung zeigen soll. Handelt ein bloßes Naturwesen, so muß es aus reiner Natur handeln, wenn es reine Selbstbestimmung zeigen soll; denn das Selbst des Vernunftwesens ist Vernunft, das Selbst des Naturwesens ist Natur.“
 - 19) カリアス書簡の2月18日付け書簡の中では、この「純粹自然」に関して、「道徳は純粹理性の規定であり、美は現象の性格として純粹自然の規定である。」(„Sittlichkeit ist Bestimmung durch reine Vernunft, Schönheit, als eine Eigenschaft der Erscheinungen ist Bestimmung durch reine Natur.“)とも記されている。Friedrich Schiller, Brief an Gottfried Körner, 18. Februar 1793, *Schillers Werke*, NA, Bd.26, S.191. (前掲のハンザー版シラー全集におけるカリアス書簡2月18日付け書簡には、書簡のはじめの部分に当たるこの箇所の掲載が省略されているため、この箇所に関しては前掲のNationalausgabeにより頁数を示す。) (邦訳同書、30頁)
 - 20) E. Spranger, op.cit., S.30.
 - 21) F. Schiller, Ueber naive und sentimentalische Dichtung, op.cit., NA, Bd.20, S.476. (邦訳同書、313頁) „Die wirkliche Natur nemlich; aber von dieser kann die wahre Natur, die das Subjekt naiver Dichtungen ist, nicht sorgfältig genug unterschieden werden. Wirkliche Natur existirt überall, aber wahre Natur ist desto seltener, denn dazu gehört eine innere Notwendigkeit des Daseins.“
 - 22) F. Schiller, Kallias oder Über die Schönheit, op.cit., 23. Februar 1793, S.416. (邦訳同書、54頁) 「それではこの意味における自然とは何であろうか。それは物の存在の内的原理が同時にその形式の根拠としてみられたもの、すなわち形式の内的必然性である。」 „Was wäre also Natur in dieser Bedeutung? Das innere Prinzip der Existenz an einem Dinge, zugleich als der Grund seiner Form betrachtet; die innere Notwendigkeit der Form.“
 - 23) Ibid., 8. Februar 1793, S.400. (邦訳同書、22頁)
 - 24) Ibid., 8. Februar 1793, S.400. (邦訳同書、22頁) „nichts frei sein kann als das Übersinnliche und Freiheit selbst nie als solche in die Sinne fallen kann“
 - 25) Ibid., 18. Februar 1793, S.404. (邦訳同書、36頁)
 - 26) Ibid., 18. Februar 1793, S.402. (邦訳同書、35頁)
 - 27) F. Schiller, Brief an Gottfried Körner, 18. Februar 1793, op.cit. *Schillers Werke*, NA, Bd.26, S.191. (註19と同様の理由によりNAによる頁付け) (邦訳同書、31頁) „Diese große Idee der Selbstbestimmung strahlt uns aus gewissen Erscheinungen der Natur zurück, und diese nennen wir Schönheit.“
 - 28) F. Schiller, Kallias oder Über die Schönheit, op.cit., 18. Februar 1793, S.404. (邦訳同書、36頁) „Selbstbestimmung des Vernünftigen ist reine Vernunftbestimmung, Moralität; Selbstbestimmung des Sinnlichen ist reine Naturbestimmung, Schönheit“
 - 29) F. Schiller, Ueber die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen, op.cit., NA, Bd.20, Brief 6, S.323. (邦訳同書、105頁) „Auseinandergerissen wurden jetzt der Staat und die Kirche, die Gesetze und die Sitten; der Genuß wurde von der Arbeit, das Mittel vom Zweck, die Anstrengung von der Belohnung geschieden. Ewig nur an ein einzelnes kleines Bruchstück des Ganzen gefesselt, bildet sich der Mensch selbst nur als Bruchstück aus, ewig nur das eintönige Geräusch des Rades, das er umtreibt, im Ohre, entwickelt er nie die Harmonie seines Wesens“
 - 30) Ibid., Brief 6, S.321. (邦訳同書、102頁) „Aber bey einiger Aufmerksamkeit auf den Zeitcharakter muß uns der Kontrast in Verwunderung setzen, der zwischen der heutigen Form der Menschheit, und zwischen der ehemaligen, besonders der

- griechischen, angetroffen wird. Der Ruhm der Ausbildung und Verfeinerung, den wir mit Recht gegen jede andre bloße Natur geltend machen, kann uns gegen die griechische Natur nicht zu statten kommen, die sich mit allen Reizen der Kunst und mit aller Würde der Weisheit vermählte, ohne doch, wie die unsrige, das Opfer derselben zu seyn.“
- 31) Ibid., Brief 6, S.322. (邦訳同書、104頁) „Weil jenem die alles vereinende Natur, diesem der alles trennende Verstand seine Formen ertheilten.“
- 32) Ibid., Brief 6, S.322. (邦訳同書、104頁) „Die Kultur selbst war es, welche der neuern Menschheit diese Wunde schlug.“
- 33) Ibid., Brief 6, S.323. (邦訳同書、104–105頁) „Jene Polypennatur der griechischen Staaten, wo jedes Individuum eines unabhängigen Lebens genoß, und wenn es Noth that, zum Ganzen werden konnte, machte jetzt einem kunstreichen Uhrwerke Platz, wo aus der Zusammenstückelung unendlich vieler, aber lebloser, Theile ein mechanisches Leben im Ganzen sich bildet.“
- 34) Ibid., Brief 6, S.326. (邦訳同書、108頁) „Gerne will ich Ihnen eingestehen, daß so wenig es auch den Individuen bey dieser Z erstückelung ihres Wesens wohl werden kann, doch die Gattung auf keine andere Art hätte Fortschritte machen können. Die Erscheinung der griechischen Menschheit war unstreitig ein Maximum, das auf dieser Stufe weder verharren noch höher steigen konnte. Nicht verharren; weil der Verstand durch den Vorrath, den er schon hatte, unausbleiblich genöthigt werden mußte, sich von der Empfindung und Anschauung abzusondern, und nach Deutlichkeit der Erkenntniß zu streben: auch nicht höher steigen; weil nur ein bestimmter Grad von Klarheit mit einer bestimmten Fülle und Wärme zusammen bestehen kann. Die Griechen hatten diesen Grad erreicht, und wenn sie zu einer höhern Ausbildung fortschreiten wollten, so mußten sie, wie wir, die Totalität ihres Wesens aufgeben, und die Wahrheit auf getrennten Bahnen verfolgen.“
- 35) F. Schiller, Ueber naive und sentimentalische Dichtung, op.cit., NA, Bd.20, S.413. (邦訳同書、227頁) „Es gibt Augenblicke in unserm Leben, wo wir der Natur in Pflanzen, Mineralen, Tieren, Landschaften, sowie der menschlichen Natur in Kindern, in den Sitten des Landvolks und der Ürwelt, nicht weil sie unsern Sinnen wohlthut, auch nicht weil sie unsern Verstand oder Geschmack befriedigt (von beiden kann oft das Gegentheil stattfinden), sondern bloß weil sie Natur ist, eine Art von Liebe und von rührender Achtung widmen.“
- 36) Ibid., S.413. (邦訳同書、227頁) „Jeder feinere Mensch, dem es nicht ganz und gar an Empfindung fehlt, erfährt dieses, wenn er im Freien wandelt, wenn er auf dem Lande lebt oder sich bei den Denkmälern der alten Zeiten verweilet, kurz, wenn er in künstlichen Verhältnisse und Situationen mit dem Anblick der einfältigen Natur überrascht wird. Dieses nicht selten zum Bedürfnis erhöhte Interesse ist es, was vielen unsrer Liebhabereien für Blumen und Tiere, für einfache Gärten, für Spaziergänge, für das Land und seine Bewohner, für manche Produkte des fernen Altertums u. dgl. zum Grund liegt.“
- 37) Ibid., S.413. (邦訳同書、227–228頁) „Diese Art des Interesse an der Natur findet aber nur unter zwey Bedingungen statt. Für s erste ist es durchaus nötig, daß der Gegenstand, der uns dasselbe einflößt, Natur sey oder doch von uns dafür gehalten werde; zweytens daß er (in weitester Bedeutung des Worts) naiv sey, d.h. daß die Natur mit der Kunst im Kontraste stehe und sie beschäme. Sobald das letzte zu dem ersten hinzukommt, und nicht eher, wird die Natur zum Naiven.“
- 38) Ibid., S.413. (邦訳同書、228頁) „Natur in dieser Betrachtungsart ist uns nichts anders, als das freiwillige Daseyn, das Bestehen der Dinge durch sich selbst, die Existenz nach eignen und unabänderlichen Gesetzen.“
- 39) Ibid., S.414. (邦訳同書、228頁) „Daraus erhellet, daß diese Art des Wohlgefallens an der Natur kein ästhetisches, sondern ein moralisches ist; denn es wird durch eine Idee vermittelt, nicht unmittelbar durch Betrachtung erzeugt; auch richtet es sich ganz und gar nicht nach der Schönheit der Formen.“
- 40) Ibid., S.414. (邦訳同書、228–229頁) „Was hätte auch eine unscheinbare Blume, eine Quelle, ein bemooster Stein, das Gezwitzcher der Vögel, das Summen der Bienen, usw. für sich selbst so Gefälliges für uns? Was könnte ihm gar einen Anspruch auf unsere Liebe geben? Es sind nicht diese Gegenstände, es ist eine durch sie dargestellte Idee, was wir in ihnen lieben. Wir lieben in ihnen das stille schaffende Leben, das ruhige Wirken aus sich selbst, das Dasein nach eignen Gesetzen, die innere Notwendigkeit, die ewige Einheit mit sich selbst.“
- 41) Ibid., S.414. (邦訳同書、229頁) „Sie sind, was wir waren; sie sind, was wir wieder werden sollen. Wir waren Natur wie sie, und unsere Kultur soll uns, auf dem Wege der Vernunft und der Freiheit, zur Natur zurückführen. Sie sind also zugleich Darstellung unserer verlorenen Kindheit, die uns ewig das Teuerste bleibt; daher sie uns mit einer gewissen Wehmut erfüllen. Zugleich sind sie Darstellungen unserer höchsten Vollendung im Ideal, daher sie uns in eine erhabene Rührung versetzen.“
- 42) Ibid., S.431. (邦訳同書、251頁) „Sie empfanden natürlich; wir empfinden das natürliche.“
- 43) Ibid., S.431. (邦訳同書、250頁) „da also der Grieche die Natur in der Menschheit nicht verloren hatte, so konnte er außerhalb dieser auch nicht von ihr überrascht werden und so kein dringendes Bedürfnis nach Gegenständen haben, in denen er sie wiederfand.“
- 44) Ibid., S.430. (邦訳同書、249頁) „weil die Natur bei uns aus der Menschheit verschwunden ist und wir sie nur außerhalb dieser, in der unbeseelten Welt, in ihrer Wahrheit wieder antreffen.“
- 45) Ibid., S.430. (邦訳同書、249頁) „Nicht unsere größere Naturmäßigkeit, ganz im Gegentheil die Naturwidrigkeit unsrer Verhältnisse, Zustände und Sitten treibt uns an, dem erwachenden Triebe nach Wahrheit und Simplität, …… in der physischen Welt eine Befriedigung zu verschaffen, die in der moralischen nicht zu hoffen ist.“
- 46) Ibid., S.431. (邦訳同書、251頁)
- 47) Immanuel Kant, *Kritik der Urteilkraft*, 1790, S.167. (頁付けはアカデミー版による。) (牧野英二訳『判断力批判』上、カント全集第8巻、岩波書店、1999年、9頁)
- 48) F. Schiller, Ueber den Gebrauch des Chors in der Tragödie, op.cit., NA, Bd.10, S.9–10. (邦訳同書、541頁) „die Kunst nur dadurch wahr ist, daß sie das Wirkliche ganz verläßt und rein ideell wird. Die Natur selbst ist nur eine Idee des Geistes, die nie in die Sinne fällt. Unter der Decke der Erscheinungen liegt sie, aber sie selbst kommt niemals zur Erscheinung. Bloß der Kunst des Ideals ist es verliehen, oder vielmehr es ist ihr aufgegeben, diesen Geist des Alls zu ergreifen, und in einer körperlichen Form zu binden. Auch sie selbst kann ihn zwar nie vor die Sinne, aber doch durch ihre schaffende Gewalt vor die Einbildungskraft bringen, und dadurch wahrer seyn als alle Wirklichkeit und realer als alle Erfahrung. Es ergiebt sich daraus von selbst, daß der

- Künstler kein einziges Element aus der Wirklichkeit brauchen kann, wie er es findet, daß sein Werk in allen seinen Theilen ideell seyn muß, wenn es als ein Ganzes Realität haben und mit der Natur übereinstimmen soll.“
- 49) F. Schiller, Ueber naive und sentimentalische Dichtung, op.cit., NA, Bd.20, S.431. (邦訳同書、251頁) „So wie nach und nach die Natur anfieng, aus dem menschlichen Leben als Erfahrung und als das (handelnde und empfindende) Subjekt zu verschwinden, so sehen wir sie in der Dichterwelt als Idee und als Gegenstand aufgehen.“
- 50) Ibid., S.432. (邦訳同書、252頁) „Die Dichter sind überall, schon ihrem Begriffe nach, die Bewahrer der Natur. Wo sie dieses nicht ganz mehr seyn können und schon in sich selbst den zerstören den Einfluß willkürlicher und künstlicher Formen erfahren oder doch mit demselben zu kämpfen gehabt haben, da werden sie als die Zeugen und als die Rächer der Natur auftreten. Sie werden entweder Natur seyn, oder sie werden die verlorene suchen.“
- 51) Ibid., S.436. (邦訳同書、259頁) „Auch jetzt ist die Natur noch die einzige Flamme, an der sich der Dichtergeist nährt, aus ihr allein schöpft er seine ganze Macht, zu ihr allein spricht er auch in dem künstlichen, in der Kultur begriffenen Menschen.“
- 52) Ibid., S.436. (邦訳同書、258頁) „Der dichterische Geist ist unsterblich und unverlierbar in der Menschheit; er kann nicht anders als zugleich mit derselben und mit der Anlage zu ihr sich verlieren. Denn entfernt sich gleich der Mensch durch die Freyheit seiner Phantasie und seines Verstandes von der Einfalt, Wahrheit und Notwendigkeit der Natur, so steht ihm doch nicht nur der Pfad zu derselben immer offen, sondern ein mächtiger und unvertilgbarer Trieb, der moralische, treibt ihn auch unaufhörlich zu ihr zurück, und eben mit diesem Triebe steht das Dichtungsvermögen in der engsten Verwandtschaft. Dieses verliert sich also nicht auch zugleich mit der natürlichen Einfalt, sondern wirkt nur nach einer andern Richtung.“
- 53) Hermann Korff, *Geist der Goethezeit; Versuch einer ideellen Entwicklung der klassischromantischen Literaturgeschichte, Erster Teil: Sturm und Drang*, Leipzig, 1923, S.99. (永松譲一訳『ゲーテ時代の精神』第一巻、桜井書店、1944年、145頁) „Die lebendige Natur und der lebendige Gott: das waren somit nur zwei verschiedene Ausdrücke für dieselbe Sache, die als Leben verstandene Natur und das als göttlich verstandene Leben. Und das war es, was die Goethezeit bei diesem Worte „Natur“ empfand: nicht die entgöttlichte Natur der mechanischen Naturwissenschaft, sondern die vergöttlichte Natur in der Auffassung einer neuen Religiosität.“
- 54) Friedrich Schiller, Versuch über den Zusammenhang der thierischen Natur des Menschen mit seiner geistigen. 1780, *Schillers Werke*, NA, Bd.20, S.64. (植田敏郎訳「人間の動物的性質と精神的性質との関連について」、新関良三編『シラー選集』、第2巻、富山房、1941年、30頁)
- 55) Friedrich Schiller, Ueber Anmuth und Würde, 1793, *Schillers Werke*, NA, Bd.20, S.284. (大庭米治郎訳「優美と尊厳とに就いて」岩波書店、1925年、127頁) „Dadurch schon, daß sie (Natur) ihn zum vernünftig sinnlichen Wesen, d.i. zum Menschen machte, kündigte ihm die Natur die Verpflichtung an, nicht zu trennen, was sie verbunden hat, auch in den reinsten Äusserungen seines göttlichen Theiles den sinnlichen nicht hinter sich zu lassen, und den Triumph des einen nicht auf Unterdrückung des andern zu gründen.“
- 56) F. Schiller, Kallias oder Über die Schönheit (Brief an Gottfried Körner), 23. Februar 1793, op.cit. *Friedrich Schiller Sämtliche Werke*, Bd.5, Carl Hanser Verlag, S.424-425. (邦訳同書、68頁) „Darum ist das Reich des Geschmacks ein Reich der Freiheit — die schöne Sinnenwelt das glückliche Symbol, wie die moralische sein soll, und jedes schöne Naturwesen außer mir ein glücklich er Bürger, der mir zuruft: Sei frei wie ich.“
- 57) F. Schiller, Ueber naive und sentimentalische Dichtung, op.cit., NA, Bd.20, S.415 (邦訳同書、230頁)
- 58) Ibid., S.414-415. (邦訳同書、229-230頁) „Sie gewähren uns also die ganz eigene Lust, daß sie, ohne uns zu beschämen, unsere Muster sind.“
- 59) Ibid., S.415. (邦訳同書、230頁) „Wir erblicken in ihnen also ewig das, was uns abgeht, aber wornach wir aufgefordert sind zu ringen, und dem wir uns, wenn wir es gleich niemals erreichen, doch in einem unendlichen Fortschritte zu nähern hoffen dürfen.“

* 本稿は、独立行政法人日本学術振興会平成21-23年度科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)採択課題「環境美学における自然美の哲学的基礎付け」(課題番号:21520112)における研究成果の一部である。